
|
XBOX

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I

【コード】

N9828G

【作者名】

XBOX

【あらすじ】

俺轢かれたんだよな。此処何処？あれ何？

転移

俺は死ぬはずだった

何故なら、車に轢かれたからだ

友達が轢かれそうだったから、助けようとして轢かれた
はずだった

でも

「ここ何処だ？」

知らない場所にいるさらに

「あれなに？」

黒い犬？または狼？のような大きな犬に囲まれていた

5匹位なんとかかなると思う

5匹ならね、でもみたところ30〜40位いる

こりゃ無理だな

その時、白と灰色の光を見た

「今の何？」

「その人、どいてください。」

「人の声、しかも日本語、ここ日本か。」

二人の人が走ってきた

一人は赤髪、碧眼の少女すでに日本でないことを確認した

もう1人は金髪といっても地毛にしか見えないしかも眼は白の力
コイイ部類の好青年

既に元の世界でもないことも確認した

現在考え付く253案のうち1つが今の状況に当てはまったし
かも1番悪い案が

などと考え込んでいるうちに戦闘終了
戦闘は魔法らしきもので戦っていた

ああ頭が痛いぞこの野郎

「何で逃げなかった。死にたいのか。」

赤髪が話しかけてきた

「状況の整理をしていた。そんなに悪いとかか。」

赤髪はキレた

「何で囲まれてるのにそこまで冷静なの。」

白眼がなだめる

「まあまあ。そう怒らない」

「簡単にいえば飛ばされたんだ魔法で、だから状況の確認をしたんだが悪いことだった」

「魔法？ ああスペルのことか。」

「スペルというのかさっきの。」

赤髪は驚いているようだ

「スペルも知らなかったの?!」

「そうだが？別の世界に行く時はまず状況の整理をするからまあそうだろ。」

赤髪と白眼は驚いているようだ

「別の世界?!じゃああんたが勇者?!」

「余計な発言はするべきじゃなかったな。」

「勇者なら国王にお取次ぎ願わなければならないな。」

(だが俺にもやるべきことはある。)

「条件がある。この世界を知るために学院に通わせる。それが条件だ。悪くはないだろ。」

「その程度ならいくらでも言ってくください。僕らも学院の生徒ですから、学院長に取り次げます。」

「わかった。行けばいいんだろ。だがその物分かりの良さわいい長生きできるぞ。」

王の名はなんという。」

白眼が

「スィール・フォン・アウスレーゼ。元勇者です。」

ふざけてやがる

「あいつの企みか。なら従おう。」

「あいつですって?! もと呼び方があるでしょう?!」

これには俺もキレた

「お前ごときに何がわかる?! 息子を捨てた愚かな母親を息子がなんといをうとかってだろ?!」

王の息子その言葉に二人は萎縮した

「王の息子だって?! そんな馬鹿な?! 第一王が女だと知ってい

るのはごく1部のはずなのにどうして知ってるの?!」

「あいつの側近だなお前たちは、あいつは何処だ。教える。さもないと貴様ら2共抹殺する」

俺は凍えた眼をしたので奴らは震えだした

「なあんてな。おれはやつに文句を言いたいだけだよ。そんな怯えるなよ。落ち込むだろうが。」

彼らはホツとしたのかこう言い始めた

「あんた名前はなに」

仕方ないか

「キリヤ・フォン・アウスレーゼ」

ぶつきら棒にそう言った

「あなた本当に王族なの?!」

そんなこと知るか

「僕の名前はキバリオン。キバリオン・ストレイドそれが僕の名前だよ。あと階級は侯爵。」

白眼がそう言った

「成程、ここは階級社会なんだな。胸糞悪いな。そうすると俺は

皇太子か。ふざけてやがる。」

そついうと赤髪が反論

「ふざけないで他にどんなものが在るって言うの?!」

「民主主義。あの女なら知っていたはずだ。」

キバリオンが「すごいですね」と言っている

「何がだ」

「あなたの世界では国民に主権があるんですね。」

物分かりがよくて助かる

「そうだ。そついう国もある。大体8〜9割かたそうだ。」

赤髪が首をかしげている

「簡単にいえば、国民が国を動かす大物と一緒にになって、国を動かすんだ。」

(やっと分かったのか。こいつ頭悪いな。勉強ぐらい教えるか。)

「頭悪い言うな!!」

「人の心を読むな。」

こいつ人の心が読めるらしい。気をつけよう。

「私の名前はレア・エメリッヒ・バルフォン。階級は公爵」

そうかいっつ

「宜しくな。俺の妹。」

へっ???とか言っている

「お前はあいつに名前を貰ったんだろ。」

「確かに女王様から賜ったものだけど。何。」

やはり馬鹿だ こいつ勉強だけは教えなければ

「俺の父親がガリソン・エメリッヒ・バルフォン。つまりお前は知らぬ間にあいつの娘になったんだよ。」

そつ言いながら頭を撫でてやった

すると

「フミユ〜」

可愛いなこいつ あいつに感謝しなければならぬ
あれっキバリオンが目を丸くしている

「これから宜しくな」

喋る武器とその材料

彼らは俺と同じと4つ以上下にしか見えない聞いてみよう

「お前ら歳幾つなの」

そう言つとレアがキレた血の気の多いやつだ

「女の子に歳を聞く普通!!!」

、を書くのを忘れたとか思ってるだろ

是でいいんだ こいつ点すら忘れるぐらいキレてるから

「まあ、いいじゃないですか。僕は17です。」

宥めにはいった こいつ親友になれそうだな

「わかったわよ!! 言えはいいいんでしょ。言えば。私は18よ。」

驚いた こいつキバリオンより上だ

「もうすぐ町に着きますよ。」

これらは街に行くまでの会話だ

「そう言えば、その背負っているものは何ですか??」

おおこいつを忘れていた

「おい起きろアルカナ。いい加減背中から降りろ。」

2人とも訝しげにしている

「ふあゝ ご主人様おはようございます。」

2人ともかなり引いている

「しゃ、喋った?!」

驚いている

「ええゝ やだゝ」

「おい、いい加減にしないと叩くぞ」

どすのきいた声で怒ってみた

「ひいゝ!! すいませんごめんなさい。許してください」

「だったら早く降りろ。」

そう言つと背中から重さがなくなった

「今の声何??」

「ガンブレードの声。」

「ガンブレードってなに??」

「銃と剣を一緒にしたやつ。」

「なんで喋るの??」

「意志を持っているから。」

「何で意思があるの??」

「特殊な金属で出来ているから。」

「金属って??」

「アダマンタイトにオリハルコン、あとミスリル。」

「全部貴重だし?!あんたが材料全部しってるのはなぜ??」

「この世界に全部あるのかあ?? 欲しいな。それとそいつは俺が作った意志を持つ武器、セブンスブレードの1本だから。」

「あの〜 どこから会話に入ればよかったですか。」

そこに顔立ちの整った少女が現れた

キバリオンはこいつが誰だか知っている

「あんた誰??」

「あつ、はいアルカナ・ハートと申します」

「アルカナよ。もう少し早く助けてほしかった。」

そう言つとアルカナは申し訳なさそうにした

「怒つてないから。顔上げる。あと他に來てる奴いるか一緒に探せ。」

「かしこまりました。索敵モード起動、魔力を補充してください。」

「

「了解。魔力を送る。索敵モード感度最大、範囲この次元全部。」

「了解。最大展開します。30秒お待ちください。」

2人ともこの間、啞然していた

「索適完了。全ブレードを確認。さらにオリハルコンを現在地から東に

3キロ地点に確認。」

「ブレードの場所は??？」

「同地点に、スィール・フォン・アウスレーゼを確認。」

ということは王宮か

まずオリハルコンを採取に行くか

「おゝい その二人ついてこい。」

「どこ行くの???町はどうするの???」

「そんなもん後だ後。 お前たちの武器作るからオリハルコンを
取りにいくぞ。」

2人をつれ山の中深くに入った

「ご主人さま、その洞くつの最奥部にあります。」

「わかった。それとご主人様はやめる。」

そう言つと

「はいっ!!」

何が嬉しいのか分からないが嬉しそうでよかった

「お前たちはここで待ってる。」

「いいえ 憑いていきます。」

俺の聞き間違いかそうであってほしい

「じゃあ、ついてこい。」

「少なかったですねモンスター。」

「うん。数10000体とドラゴン数100匹は覚悟してたのに拍子抜けだな。」

「あれで少ないですって!! どんだけ危険な場所に連れてきたか、わかったてるの?!」

「だから入り口で待てと言ったのについてくるから。」

「だいたい伝説の金属だぞ。そう簡単に手に入ったら伝説じゃないし、

それにあれ位で死んでたら。俺と肩を並べることはいできないよ。」

「簡単にいえば、俺がドラゴンの最上級のバハムート、4300体位のモンスター

をバハムート以外1瞬でかたしたのが気に食わないらしい

バハムートは10分もかかった

セブンスブレードが全部あつたら15秒でかたづけられたのに

「仕方ないでしょ。私たちの武器を作ってくれるんだから。

それぐらいいいしなくちゃ。それにあんただけ強いんだよ。

最初助けたのが馬鹿あたい。」

そう言うと2人ともぐったりしている

オリハルコンの採取を行おう

「結構大漁だな。オリハルコンだけじゃなく、ミスリル アダマタイト その他に石炭

など32種類の鉱石を手に入れられた。」

「はい 予想外です。あれ???何か剣のようなものがあります。これも持っていきましょう。」

「そうだな。」

剣の材料にはなるだろう

「甥二人共、帰るぞ。 鉱石は俺の術で亜空間に飛ばしたから、その亜空間をとおて帰るぞ。」

「そんな便利なものあるんだつたら最初からつかってくださいよ。」

「無理。完全に場所を把握していないから。」

「じゃ行くぞ王宮に。」

「はあ???今は夜じゃないの???」

「何を言ってる。もう午前6時だぞ。」

ほらお前達はやくこい。新しい武器が欲しいんだろ」

「ほしい(です)」

「なら来い」

いぢぢあいつのもとえ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9828g/>

2010年11月21日02時24分発行